

2月如月 春の足音 神戸便り

2023.2.15. Mutsu Nakanishi



収録 ふむ ふむ ふむ 思いつくまま 2023年2月 神戸新聞より

1. 神戸新聞 2023.2.11.朝刊 如月の随想 「遠野物語は懐かしく新しい」より
2. 神戸新聞 コラムにみる 令和5年 ポストコロナの新しい時代の始まり
3. 文珍さんも落語的見聞録で・・・ 「SNSの陰に潜む鬼に用心」と 2023.2.9.

厳しい寒波にみまわれた1月の末 2月節分・立春を過ぎて 春の足音がすぐそこに
年の初めから ビックリするような出来事が次々と起こった ポストコロナの新時代

世相は混沌 不安感一杯の混乱と革新 日本のみならず世界が混乱の渦の中

幸い まだまだ予断は許さぬが、コロナは収束へ向かい始めているようだ

早く穏やかな暮らしに戻りたい 前向いてこの厳しい時代を乗り切ってゆかねばと。

三寒四温の春の足音 暖かい日差しにほっと一息 戸外に飛び出して

2023年如月 Mutsu Nakanishi From Kobe



春の息吹 フキノトウ 西神戸で
厳しい寒さでしたが、立春と共に
暖かい日差し 春遠からじ



本年になっても ロシアのウクライナ侵攻は終結せず、ますます拡大の道 山積する課題に右往左往する世界
一方、日本を取り巻く中国・北朝鮮の脅威も身近に・・・ 資源のない日本にとっては益々厳しい時代に。

この厳しいポストコロナの変革の時代に 高齢化・疲弊・格差が進む中 いまだに経験・頂点同調同質を求める
日本社会の課題が山積み。資源のない日本で、ますます進む物価高 世界が見放したら・・・

飛び出す姿勢を無くしては 新しい時代を切り開けず。

苦難を切り開くエネルギーを持つ若者たちに期待一杯 元気に取り組む若者たちにエールを送ります

本年1月中旬から2月半ばにかけての世相に関する新聞スクラップを下記に示しましたが、本当にビックリするような事が次々と。ポスト新時代地球人としての生き方を求められる深刻な日本の課題が噴出してきている。

みんな地球人

「自分さえよければ・・・」ではどうにもならぬ。
「世界と共に生きる時代」に 経験・頂点同調を振りかざしても到底生き抜けぬ。

判っているけど、解はなし。

バンドラの箱を開けると見えてくる厳しい日本の実態

日本の疲弊と孤立 物価の上昇に追い打ちをかける雇用不安

朝令暮改 混迷を深める日本の仲間政治と孤立感 誰しも抱く明日は我が身の厳しい時代に……

そんな風潮を冗長するかの如く 理不尽な日常の暮らしを奪う事件が次々と起る。

自分の事と捉えてくれぬ世間

「自己責任」の冷めたい声に目を奪われる。

「自分ならどうする???」と自問自答するが……。

ポストコロナの新時代の始まり

みんな地球人「自分さえよければ・・・ではどうにもならぬ令和の新時代」この厳しい新時代の中で平和で穏やかな暮らしを

みんながみんな 早く取り戻せますように

ビックリするような事が次々と起こってきた世相
あなた任せにできない変革の新時代の到来です。

地球全体に吹きまくる厳しい嵐に

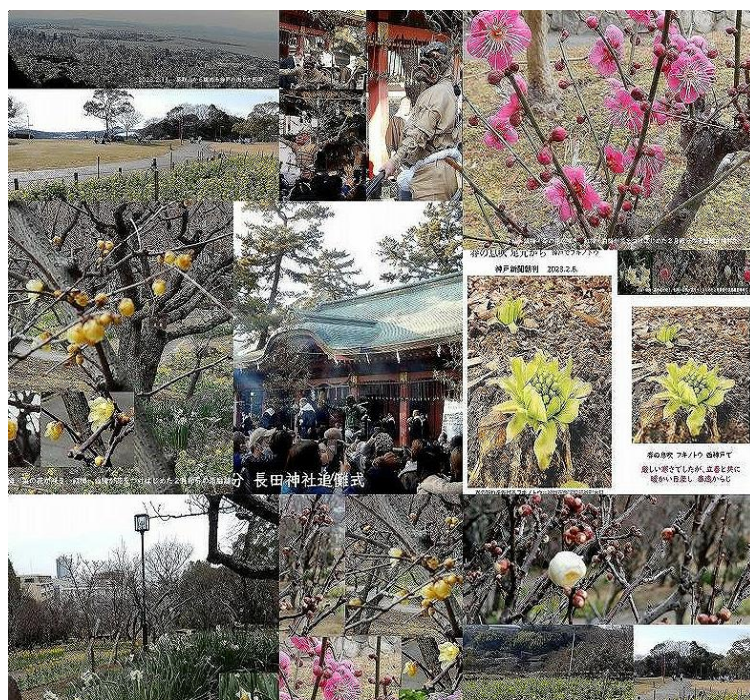
立ち位置しっかり 前向いて。

答えはないが、いつ わが身に……と。

そんなことも考えるこの春ですが、暖かい日差しの中に 身を置いて 今を元気にと

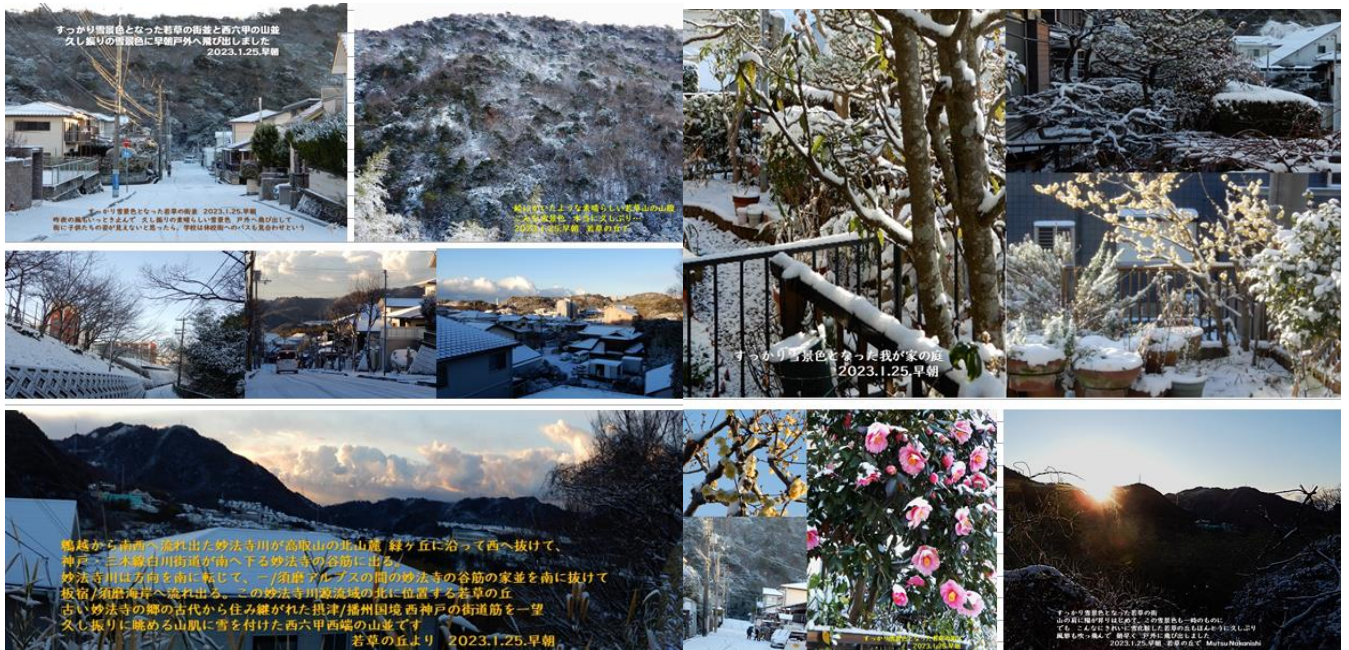
大空見上げ ほっと一息 春の日差しを胸一杯前

三寒四温 春の足音 春はもう すぐそこに



◎ 神戸の歳時記 2月春の息吹 春の足音 春はもうすぐそこに

■ 寒波襲来 すっかり雪化粧した自宅周辺 須磨妙法寺若草の丘で 2023.1.25. 早朝



すっかり雪景色となった若草の街 山の肩に陽が昇りはじめて、この雪景色も一時のものに
でも こんなにきれいに雪化粧した若草の丘もほんとうに久しぶり 風邪も吹っ飛んで 朝早く 戸外へ
でも 寒波襲来の豪雪に見舞われた方々にとっては 本当に厳しい雪景色。大変だったろうと。
また、厳しい寒さに耐えつつ ロシアと対峙しているウクライナの人たちにも早く平和な日常が訪れますように。
北風小僧 もうこれで 飛んでいけ!! 何とかコロナもこのまま収まって 春を待ち焦がれます。

God be with You!! 2023.1.25.早朝 若草の丘で

■ 長田神社 節分追儺式と須磨離宮公園の蟬梅と梅 2023.2.3.



■ 青空に流れる雲 ぽかぽか陽気に 菜の花が咲き始めたコスモスの丘には家族ずれ 2023.2.13.



春はもう すぐそこに 子供たちの明るい声が響く 喜び一杯 運んで春よ来い

From Kobe Mutsu Nakanishi

1. 神戸新聞 2023.2.11.朝刊 如月の随想「遠野物語は懐かしく新しい」より
2. 神戸新聞 コラムにみる 令和5年 ポストコロナの新しい時代の始まり
3. 文珍さんも落語的見聞録で……「SNSの陰に潜む鬼に用心」と2023.2.9.

1. 神戸新聞 2023.2.11.朝刊 如月の随想「遠野物語は懐かしく新しい」より

久し振りに赤坂憲雄先生の随想記事に接した。かつて縄文三内丸山遺跡で何度かご一緒したことがある。

いつも静かな語り口で、深く物事を眺める眼差し。縄文遺跡の展示を前に

「この巨木がここまで どんな方法で運ばれてきたのか… 村の人たちは……」と考えておられたのを思い出す。

「東北学」そして 関東大震災からの東北復興にも、経済優先の世相の中で 東北の人たちの暮らしに寄り添った提言・評論記事をも。

今回の記事「遠野物語」の奥底に流れる今を生きる日本へのまなざし。しっかりと。

神戸新聞にぶれることなく現場主義を貫き、評論を掲載されてきた内橋克人氏がなくなられ、その鋭い指摘を目にすることがなくなって、寂しくなった昨今 赤坂先生の「遠野物語」の随想のまなざし 心に響きました。

ポストコロナの新時代 数々の情報がまき散らされる時代に「ぬるま湯の心地よさ」ばかりに浸っていてはならぬと。また、厳しい世相の中 新聞コラムにはっと気が付く事多しです。

文化

神戸新聞朝刊
2023.2.11.



あかさか・のりお 1953年東京都生まれ。学習院大教授。元遠野文化研究センター所長。著書に「排除の現象学」「増補版「遠野物語」」「性考」など。



絵・王瑒

たとえば、吉本隆明の「共同幻想論」を抜きにして、はたして「遠野物語」との出会いはあるか。そう問いかけてみる。「共同幻想論」の難解さにつまずきながら、そのトラウマゆえに、わたしは若い頃から、「遠野物語」を飽かず繰り返し読んできた。

遠野物語は懐かしく新しい

赤坂憲雄

如月の随想

その舞台である遠野という土地もまた、幾度訪ねたか知れない。最近になって、ようやく「共同幻想論」の呪縛が解けて、「遠野物語」を無心に読めるようになったのだ。言えは、笑われるだろうか。昨年は、大学の講義のテキストに「遠野物語」を選んだ。コロナ禍ゆえにオンライン授業であったが、そこに収められた119話の短い物語を丁寧に読み通す、得がたい機会になった。

若い世代の人たちは、「遠野物語」をどのように読むのか。明治末年に、たつた350部の自費出版の形で刊行された「遠野物語」は、もはや古典として読まれる運命にあるが、現代にまで地続きでつながっているところが確かにある。その怪異譚には今も、若者たちの魂を揺さぶる力がはらまれているようだ。

以前に、アラスカ大学の先生から、こんな話を聞いたことがある。英訳版を授業で読ませているが、学生たちの感想のなかに、「二つの言葉が頻出する、という。それが「不思議だ」と「懐かしい」という言葉であると知って、驚きに打たれた。「不思議だ」はわかるが、「懐かしい」とはどういうことか。

「遠野物語」はやがて、世界文学として読まれる時代が訪れるのかもしれない、と思つた瞬間でもあった。ローカルなみちのくの泥にまみれた、100年前の物語の群れが、現代の日本を生きる若者たちに、また遠い異国の若者たちにも示唆的なのである。

しかも、「原本 遠野物語」(岩波書店)の刊行によって、「遠野物語」の誕生のプロセスを具体的に跡づけることが可能になった。柳田国男の毛筆の初稿からペン書き原稿、さらに赤字入りの入稿ケラ、初版本へと、「遠野物語」は生成を遂げていった。それが手に取るようにわかる。語りと文字テキストの関わりをほどこための手がかりが詰まっている。

研究の深まりはこれからだが、「遠野物語」はやがて、稀有なるテキストとして再発見されるにちがいない。そのとき、多言語に翻訳された「遠野物語」は、「懐かしい」世界文学として、新たな命を吹き込まれるはずだ。

(民俗学者)

2. 神戸新聞 コラムにみる 新しい時代の始まり

混乱と革新の未来不安の門出 人任せにできぬ先行き不安の道 風潮に流されず、考えよう

- ◎「絆」言葉遊びにならぬよう 社会の安全網・セーフティーネット 1.17.が過ぎて寒い集合住宅火災に 2023.1.23.
中央が地域の暮らしを破壊したと 世界が奇異の眼で見ている日本 頂点同調 何も決めない日本

正平調

〈炬燵の間母中心に父もあり〉（星野立子）。家事が一段落し、こたつに入って一息つく母親の周りに子どもが集まる。いつもは怖い父親もそこに交じっている。家族の光景が思いつく。家族だけでなく、学校の友達、職場の仲間や近所さん。愚痴をこぼし合ったり、夢を描いたり。この人たちはどんな人生を歩み、どんな話を語らってきたのだろう。◆そんなことを思いながら、きのう朝刊の記事を読んだ。神戸市兵庫区の集合住宅で火災が起き、4人が命を落とした。重体に陥っている住人も。いずれも1人暮らしの男性とされる。◆集合住宅は高齢になったり体を壊したりして収入が途絶え、生活に困窮した人たちの頼みの綱となっていた。保証人や入居の審査は必要なく、生活保護を受けて一息つくことができる。そんな場所◆狭いながらも足を伸ばして眠ることができる。管理人さんが通院に付き添ってくれる。ヘルパーさんの介助も受けられる。人と縁、支援がつながり、やっとの思いで手にした暮らし。それを未明の炎がのみ込んだ。◆今、このときも焼け出された住人を受け入れる人、受け皿住宅を探して奔走する人がいる。それだけでいいのか。太い綱を束ねた、社会の安全網がある。 2023.1.24

- ◎「福は内 鬼も内」内に招いた鬼が笑う家には災難が寄り付かなさそうだと 2023.2.3. 節分

正平調

1月の寒の入りからほぼ1カ月が過ぎた。今季最強の寒波到来で雪が舞う日、口を突いて出たのが、これ。へおおきむこさむ、山から小僧が飛んで来た。北風に向かい歌っていると、懐かしいやらおかしいやら、体も温まったような気がした。◆今日は節分、暦の上では冬の最後の日となる。この先1週間の予報を見ると、各地で平年より気温が高い日がちらほら。近所の公園の紅梅もほころぶ頃だ。◆節分といえば仏教の寺では、豆まきで「福は内、鬼も内」と発するところが多い。「幸福と不幸、福と鬼は一体のもの。内なる鬼を知ること福のありがたみも分かる」という住職の話を持聴したことがある。◆鬼の話で思い出すのは童話の「泣いた赤鬼」。人間と仲良くなりたい赤鬼のため悪役を演じた友達の青鬼は、一緒にいれば芝居がばれると姿を消してしまう。赤鬼に「ドコマデモ キミノ 友ダチ」と書き置いて。涙腺がゆるんで、思わず「鬼も内」◆姫路の書写山円教寺や神戸の長田神社では鬼は仏の化身や神の使いで安寧をもたらす。笑う門には福来たるというが、来年のことを言う鬼が笑う。内に招いた鬼と一緒に笑う家には厄災が寄り付かなさそう。◆豆にイワシ、恵方巻き、縁起もかついで春へ。ぐつと踏み出したい。 2023.2.3

- ◎ 驚愕の「闇バイト」犯罪 何でもかんでも情報万能の世相 「バイト」ほかネットには闇が横行
人類が生き抜くことができたツール「表情」・「なまの声」それを捨てては生きられぬ

正平調

松本清張さんの「黒革の手帖」は、黒い手帳が物語の幕を開ける。そこには、架空名義で脱税する者たちの名前が書きこまれていた。銀行員だった主人公はそれを手に危うい道を歩く。◆手帳を脅しに大金を得て、銀座で開いたバーの名は「カルネ」。フランス語で「手帳」を意味する。「変わった名だな」と人は言う。しかし主人公が華やかな場をやっとつかめたのは、この手帳があったから。◆日本の各地で凶悪な強盗事件が相次いだ。その犯行をフィリピンから指示したとされる男たちが、捜査の網にからめとられていく。犯罪には時代のおいがするものだが、前代未聞のこの事件が漂わせるものは？ ◆押収された携帯電話に注目する。主犯格とみられる男たちの携帯である。まるで「黒革の手帖」のように、表には出せない情報が詰まっていることだろう。解析は大変な作業のようだが、解き明かしてほしい。◆現代版の「黒革の手帖」にはやりきれなさも詰まる。実行犯たちは交流サイトの「闇バイト」に吸い寄せられたようだ。大金を奪い、人の命までも軽々しく扱う犯罪がバイト？ 事件の背景にある世相が気になる。◆清張さんの小説は、主人公の悲鳴で終わる。こちらはどんな結末が待つか。異様な犯罪の真相を見つめよう。 2023.2.9

調平正

かつて関西の談合組織を支配し、業界で「ドン」「天皇」と呼ばれた人

がいる。2004年に81歳で亡くなった平島栄さんだ。本紙のインタビュ

ーで、その「哲学」を語ったことがある◆「談合というから世間に本質を理解してもらえない。私はあくまで『調整』をしてきただけだ」。では、正当化できる理由とは。1、日本には元来、共存共栄の思想がある。2、発注者が決める予定価格は超えないから、価格の不当な引き上げではない◆そして3、裾野の広い建設業界で働く人の暮らしを守り、失業者の受け皿にもなってきた。そう語る表情は真剣そのものだったという。共感した人はどれぐらいいるか◆先日、4人が逮捕された五輪談合でも「必要悪」という言葉が広告業界から聞こえる。いわく「ノウハウのない会社

に運営は無理」「受注調整は必然的で現実的だ」と◆平島さんの主張を、当時の公正取引委員会委員長だった故・根来泰周さんは明快に否定した。「談合は一部のものが利益を得るシステム。自由な経済社会への挑戦だ」◆もう20年も前の話である。正論は建前のままだしい。東京地検特捜部のメス「広告ムラ」の深部を刺した。共存共栄と業界の利権はコインの裏表でもある。患部に広がる膿はどれほどか。

2023.2.11

3. 文珍さんも落語的見聞録で・・・「SNS の陰に潜む鬼に用心」と 2023.2.9.



落語的見聞録

SNSの陰潜む鬼に用心

1月の末はえらい久しぶりの大雪で、鎌山の実家は町の呉服屋の一人娘お福が雪まみれ、新雪の中、足跡風邪をこしらえ、帰らぬ人がボソボソと残っている。さき、エンマ大王に引き出され、郵便受けのところにまで行く。戻っている。ああ、寒い中、配達していただいた。感謝感謝。

そして節分。毎年わが家はヒラギの枝にイワシの頭をつけ、豆まきをする。鬼の役はジャンケンで決めるのだが、去年も今年も私メが鬼役となった。「鬼は外、福は内」と豆を投げられた後は、年の数だけ豆を食べねば、と。しかし、この年齢ともなると無理。恵方は今年、南南東。黙ってでも喉に詰まりそうでお茶ノ。家人が「しゃべったらアカン」と、自分お茶ノ。と笑って節分が終わった。

昨今、鬼は外国から交流。サイト(SNS)で指令を下す。いよいよ鬼は、広域強盗事件や特殊詐欺外、福は内」と、まことに欺事件を起すらしい。そかわいい。最近の鬼は松の木の下でといる。まるで映画「ミはなく、SNSの陰に隠れツシヨ・インボツシブしている。どんなドカ雪が降ル」のようだ。闇バイトでり積もっても足跡さえない100万円が手に入るなど。スマホは便利だが悪事という口車のサイトで知らにも使われる。インターネットに及ぶのだからなまったセーフティーネットを張らものでない。世の中、そんな甘い話があるわけが無い。(かつら・ぶんちゃん落語家)

次回3月9日

落語「福は内」では京都府室の大雪で、鎌山の実家は町の呉服屋の一人娘お福が雪まみれ、新雪の中、足跡風邪をこしらえ、帰らぬ人がボソボソと残っている。さき、エンマ大王に引き出され、郵便受けのところにまで行く。戻っている。ああ、寒い中、配達していただいた。感謝感謝。

そして節分。毎年わが家はヒラギの枝にイワシの頭をつけ、豆まきをする。鬼の役はジャンケンで決めるのだが、去年も今年も私メが鬼役となった。「鬼は外、福は内」と豆を投げられた後は、年の数だけ豆を食べねば、と。しかし、この年齢ともなると無理。恵方は今年、南南東。黙ってでも喉に詰まりそうでお茶ノ。家人が「しゃべったらアカン」と、自分お茶ノ。と笑って節分が終わった。

昨今、鬼は外国から交流。サイト(SNS)で指令を下す。いよいよ鬼は、広域強盗事件や特殊詐欺外、福は内」と、まことに欺事件を起すらしい。そかわいい。最近の鬼は松の木の下でといる。まるで映画「ミはなく、SNSの陰に隠れツシヨ・インボツシブしている。どんなドカ雪が降ル」のようだ。闇バイトでり積もっても足跡さえない100万円が手に入るなど。スマホは便利だが悪事という口車のサイトで知らにも使われる。インターネットに及ぶのだからなまったセーフティーネットを張らものでない。世の中、そんな甘い話があるわけが無い。(かつら・ぶんちゃん落語家)

次回3月9日